

多数歯齲蝕児の幼児期から思春期までの長期管理例

○北岡 裕子

アップル歯科・小児歯科クリニック

【緒言】

近年、小児の齲蝕罹患率が減少傾向にある一方で、多数の重度齲蝕を有する小児もまだまだ存在し、小児の齲蝕の二極化が問題となっている。

また、乳歯の齲蝕の罹患状況は、永久歯齲蝕の発症に大きく影響することから、生涯にわたる口腔健康の維持のためには、幼児期からの長期にわたる適切な治療、管理が必要となってくる。

今回、幼児期に多数歯齲蝕が発症した患児の長期口腔管理を行ったので報告する。

【症例】

初診時年齢：5歳11か月 男児

初診時主訴：歯痛

既往歴：特記事項なし

現病歴：3年ほど前より全顎的に齲蝕があり、他院を受診するも、非協力的なため治療が行えず、練習のために通院している間にも齲蝕は進行してしまっただ。その後転院し、抑制下での治療を何度か行ったものの、通院することを極端に嫌がるようになってしまった。2日前より下顎右側臼歯の痛みを訴えたため、当院を受診した。

口腔内所見：すべての歯に齲蝕を認めた。痛みのある下顎右側臼歯部においては、下顎右側DにC₃、EにC₂を認めた。

【処置および経過】

患児はこわがるものの、痛みがあることもあり、口腔内検診およびレント

ゲン撮影はスムーズにできた。痛みの原因は、下顎右側Dの急性歯髄炎と診断し、浸潤麻酔下での抜髄治療を行った。麻酔時は、泣いて嫌がったため、抑制したものの、その後ラバーダム下での治療中にだんだん落ち着きをとれもどした。そこで、鏡を持たせて、TSD法を用い説明しながら治療をしていくうちに、治療に興味を示し、協力的になり、初回の治療を終えることができた。その後、歯髄の保存可能な歯を優先して、ブロック治療を行った。

治療終了後は、定期健診へ移行し、現在14歳6か月、定期管理中である。小学生の間はプラークコントロールも良く、比較的齲蝕の発生も抑えられていたが、中学生になってから、来院回数が減り、齲蝕活動性が高くなり、齲蝕を繰り返すようになった。

【考察】

非協力児においては、治療が困難であることから齲蝕が重症化し、転院を繰り返してから来院してくるケースが多々あり、小児歯科専門医としての広報活動が必要であると感じた。

生涯にわたる口腔健康の維持のためには、幼児期の齲蝕をしっかり治療し、定期管理を長期に行うことが重要となる。その際、生活環境の変化を個別に考慮していくことが大切で、とくに思春期以降は子供本人への教育が非常に重要であると感じた。

中学生になると、生活環境が急激に変化し、とくに部活動におけるスポーツドリンクの常飲などにより、齲蝕活動性が急に高くなることが多い。本症例において反省すべき点であるとともに、思春期の子供への指導の困難さを改めて感じた。今後成長に伴い同じ齲蝕を繰り返さない為に予防に向けての更なる指導の必要性を感じた。